



詩／イタダキマス アーサー・ピナード 2
わたしが読んだ童心社の本③／磯崎園子 3
レポート 童心社60年展／川辺陽子、淵上野乃 4-5
新刊紹介／ひこ・田中、笹野智子 6
松矢勝宏 7

イラスト／黒井 健



ナンセンスについて考える

内田麟太郎

ナンセンス絵本を書いているからだろうが、よく「ナンセンスは分からない」といわれる。わたしもよくは分からない。それでも書いている本人だから、ときどきはナンセンスについて考える。それは自分のためというよりも、聞かれたときに備えてのようだ。長新太さんもそうだっただろうけど、本人にとっては、そんなことはどうでもいいというところがある。ナンセンスは気持ちいい。ナンセンスはおもしろい。だから書いているのひと言に尽きるのだから。

でも、そう威張ってばかりもおられないだろう。おそらく読者が戸惑うのは「意味が分からない」「必然性がない」ということだと思う。わたしには名刑事が浮かんでくる。彼はこんどばかりは犯人像がまったく浮かんでこない。動機がまったく分からないからだ。「犯人の狙いは金か、ポストか」。分かるはずがない。犯人は愉快犯。ただ犯罪そのものが楽しかっただけだ。それが動機なのだから。

といっても、わたしはなににも犯罪を賛美しているのではない。読者であるあなたが、長さんの絵本を読んだ第一印象は、たぶんとても楽しかったはずだ。しかしあなたはなぜ楽しいのか、その動機（意味）を説明できなくて、困惑し拒否しているのではないだろうか。たぶん。

ひとは自殺する。だが自殺するニワトリはいない。それは人間が、言葉・理性・神という第二の自然を生んだからだそう。言葉も、理性も、神も、人間の世界に価値観を持ちこむ。「わたしはつまらない人間だ」など。

言葉がいけないというのではない。理性もいらないというのではない。でも、それが第二の自然であるが故に、自然人でもある人間を呪縛することはないのだろうか。わが神、わが思想を、唯一とする人たちによる殺人は後を絶たない。呪縛の強さといっていい。意味に縛られた世界がゆえに。

だから、人はときどき意味や価値の世界を離れ、ふわふわと空を飛ぶのもいいのではないだろうか。絵本『ゴムあたまポンたろう』（長新太・作／童心社）の、ポンたろうさんのように。

♪風か 柳かあ～ ポンたろうさんかあ～

今日もわたしは「ポンたろう月夜」を歌いながら空を飛んでいる。ふわふわふわ。正しいことより楽しいことが好きだから。

(うちだ りんたろう／絵詞作家)

いまの日本語では、いつなにを食べても

はじめにイタダキマスとあいさつしますが、

むかしはさまざま言い方がありました。

夏になれば人びとはスイカダキマスと西瓜をほおぼり、

秋には焼き栗をむいてクリツタダキマスとかじり、

納豆をかつこむ前のあいさつはネバツタダキマスでした。

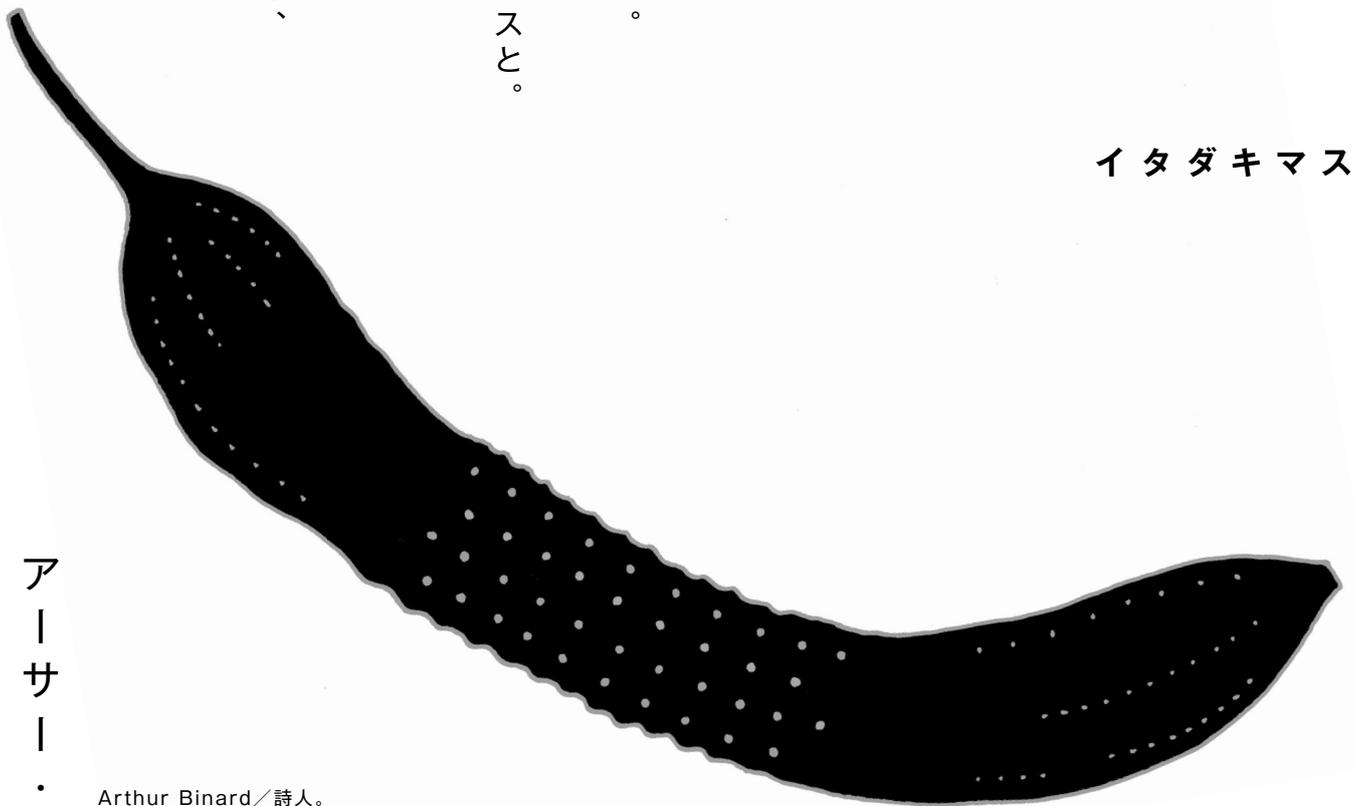
胡瓜は、しわしわの古漬けであつてもキュリツタダキマスと。

ミニトマトに関してはトマツタダキマスと声をはりあげ、

西の方を向いて唇をまるめてちよつと止まってから

ぱくつくという風習もあつたそうなの。

イタダキマス



アーサー・ビナード

Arthur Binard / 詩人。

1967年米国ミシガン州生まれ。

大学卒業と同時に来日、日本語での詩作、翻訳を始める。

詩集『釣り上げては』(思潮社)で中原中也賞、

『さがしています』(童心社)で講談社出版文化賞絵本賞受賞。

文化放送で「アーサー・ビナード 午後の三枚おろし」が放送中。

創業60年記念

わたしが読んだ童心社の本3

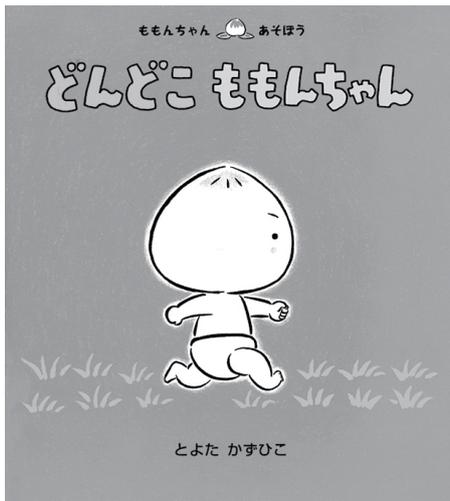
息子が夢中に

なって

いたわけは…？

磯崎園子

いそぎき そのこ／絵本情報サイト「絵本ナビ」編集長。大手書店の絵本担当という前職の経験と、自身の子育て経験を活かし、「子育て」「絵本」をキーワードとした情報を発信している。



とよたかずひこ／さく・え

「子どもが生まれてから、好きになった絵本」と言って、真っ先に思い浮かぶのが「ももんちゃん あそぼう」シリーズ。息子があかちゃんころから繰り返し読んできたのだけれど、まったく飽きることはないどころか、今でも絵本を開くたびに顔が緩んでしまいます。でも、一体どうしてそんなに惹かれてしまうのでしょうか。

例えば、「ももんちゃんがつちの子に似ている」。これはどの家庭でも共通する感想のようです。何をしても我が子に見える、頑張っていると泣けてくる……。もはや他人事ではありません。

次に、「読んでいて気持ちがいい」。口に出して読みたくなる語感とリズム。これは重要なポイントです。特に小さな子は、気に入れば何回だって、何十回だって、平気でリクエストしてきますからね。ところが「ももんちゃん」シリーズは、ちっとも苦になりません。調子が上がってくれば、それを察してか、子どもたちのノリもどんどん良くなっていきます。子どもたちの嬉しそうな様子を見ているのは、もちろんたまらなく幸せな瞬間です。

さらに、「ダイナミックなストーリー展開がクセになる」。ここであの子が登場して、次にちょっとしたハプニングが起きて……。どのお話も奇想天外でいながら、最後にはちゃんと甘えられる場面が待っています。我が家では、『どんどこももんちゃん』のくまさんが倒れるシーンで、必ず一緒にどーんと床に転がることになっていましたっけ。

と、そんな風に思い返していると、既に中学生に

なった息子が隣にいたので、渡してみます。すると息子は、ペラペラとめくりながらしみじみ言います。「なつかしいー、この大きいくまー」

「あ、このサボテンも、きんぎょもー」

そのとき、初めて気づいたのです。あれ、息子はこの絵本を「ももんちゃん視点」で楽しんでいたんじゃないか？と。ももんちゃんのことよりも、出会うキャラクターや出来事の方をよく覚えているようなのです。子どもにとって、それは面白いはず。だって、どんどこ歩いていった先に大きなくまさんが立ちはだかっけて、おすもんでどーんと倒すのです。お風呂に入っていると、ヘンテコなきんぎょさんやサボテンさんが入ってくるのです。大きくなつしさんをおさんぼさせるのです。ももんちゃんが大きな頭をどちっけつければ、痛かったでしょうし、えーんえーんと泣いている子を見れば、自然となでなでしてあげていたのでしょ。

シリーズは全部で十八冊。どの絵本の中で楽しんできたのか、子どもによって思い出や記憶も違うのでしょうか。かくれんぼをしていた子もいれば、シリーズに登場しているキャラクター全員と仲良しの子もいるでしょう。十年越しでまた新たな魅力を見つけてしまうとは……。ももんちゃん恐るべし。

今までどちらかと言つと、読んであげる大人たちの間で絶大な人気を誇っていると思いついていた私ですが、どうやら子どもたちも負けず劣らず夢中になっていたようです。ああ、またシリーズ全部を読み直してみたくなってきました。

童心社創業六十周年を記念して、

三月十八日から四月九日まで、

銀座・教文館にて展覧会を開催いたしました。

たくさんの方にご来場いただき、

会期中行われたイベントも大盛況でした。

ありがとうございました。

今回はお二人の方が、

展覧会についてお言葉を寄せてくださいました。



いわむらかずお 講演会
「14ひきのシリーズ」とわたし

本の力を信じて
川辺陽子

グセラの本に囲まれて、ウエンライトホールとナルニア国を訪ねてくださるお客様と一緒に、私たちが楽しい時間を過ごすことができました。

教文館九階のウエンライトホールで開かれた『童心社60年展』の第二会場として、六階の『子どもの本のみせ ナルニア国』は、童心社の書籍・紙芝居の販売と『おしおのぼけん』の原画展を開催しました。この時期、店に入ったところにある店内で一番大きな平台には、『いないいないばあ』をはじめとする「松谷みよ子あかちゃんの本」シリーズと、「14ひきのシリーズ」が全点平積みされました。絵本を並べ終わってコーナーを見たとき、改めて「なんて美しい本たちだろう」という感動がわきあがりました。あかちゃんにこそ美しい日本語で語りかけ、最高の絵を見せたいと作られた作品は、半世紀も前に出版されたとは思えないほど洗練されていて温かく、「わたしを読んで」と呼びかけてくるように思えました。また、十二点並んだ「14ひきのシリーズ」からは、心地よい澄んだ空気が立ち上ってくるように感じられました。人は美しいものや心地よいものに触れたとき、自然と笑顔になり気持ちが変わるものです。会期中、素晴らしいロン

今回、展覧会場の入り口には、童心社の創業者である村松金治氏の言葉が掲示されていました。その文章は子どもの本の持つ大きな可能性を語ると同時に、厳しい自戒を込めたものでもありました。「わたしは、本は、子どもにとって、とても大切なものだと考えています。それだけに出版社は、つねに良心の灯をともしている必要があると、毎日、毎日、心をあらたにしています」という言葉には、戦争中に子どもの本が果たした役割——戦争を賛美し、国のために死ぬことを尊いとしたこと——が決して小さいものではなかったことへの、深い反省があるように思います。子どもたちの未来が平和で健やかなものであるために出版社として何ができるか、創業者・村松金治氏の思いを受け継いで六十年間歩んできたのが童心社という出版社なのでしょう。すべからず子どもの本はいまわしい戦争を止める力を持っていることを信じて、これから子どもたちの心を楽しませ、豊かにする本や紙芝居を作り続けてほしいと願っています。

(かわへ あきこ/教文館ナルニア国店長)



童心社60年展

—ずっと子どもと もっと子どもと—



『いないいないばあ』のフォトスポットで、ポーズ！



紙芝居のお話し会の様子



田畑精一・酒井京子 対談
『おしおのぼうけん』誕生のひみつ

『いないいないばあ』（松谷みよ子／ぶん 瀬川康男／え）
『おしおのぼうけん』（ふるたたるひ・たばたせい／作）
「14ひきのシリーズ」（いわむらかずお／さく）



淵上野乃

もうすぐ二歳になる孫娘をつれて、会場を訪れました。創業以来、童心社が出版してきた絵本と紙芝居から、貴重な原画や資料が並んでいました。娘、息子たちが子どものころ何度も読んだ作品や、

今、孫娘と楽しんでいる作品もあります。「この本、大好きだよね」と、バギーを押すお母さんが子どもに話しかけていました。原画の前で絵本の文章を思わず声に出し、子どもに読み聞かせていたのは、私だけではありません。すばらしい作品と出会い、ワクワクドキドキした記憶は、ずっと心に残る。その力と温かさを改めて感じました。

先に進んでいくと、絵本の世界に入っ
て写真をとれるフォトスポットがあり、
子どもたちだけでなく、元子どもたちも
にこやかにポーズを決めていました。さ
らに子どもたちが喜んでいたので、千点
以上もの紙芝居と絵本を自由に手にとっ
て楽しむことができる。おはなしのへ
やゝでした。「あれも知ってる、これも
知ってる」と、棚から作品を取り出して
は確認している孫娘。年の差つん十年の

二人そろってテンションが上がってしま
いました。大人にとっても、子どもにと
っても、自分が読んだ本はとても大切に
また出会うと心がおどるのです。スタッ
フの方が紙芝居を演じてくださった機会も
あり、みなさんの笑顔を見て、「ずっと
子どもと もっと子どもと」って、こう
いうことなんだな。童心社の「童心」っ
て、こういうことなんだな。そう、心か
ら思いました。

今回、何より嬉しかったのは、『おし
おのぼうけん』の田畑精一さん、「14
ひきのシリーズ」のいわむらかずおさん
のイベントです。いつもは親子サロンの
などで絵本を紹介する活動をしている私は、
ロングセラー絵本を生み出したご本人た
ちのお話をうかがえるとあって、はりき
って出かけました。お二人とも、少年時
代に戦争を体験されています。そのあと
どのように絵本作家になりました。これまで歩
んでこられたのか……ここでは書ききれ
ないのが残念ですが、作家の人生とそこ
から生まれた深い想いが、作品の奥に流
れていることを知りました。こんな時代
だからこそ、その想いが多くの人のびとに
伝わることを願います。

どうぞいつまでも、かわらぬに。
「ずっと子どもと もっと子どもと」

（かちかみ のの／J・P・C読書アドバイザー）

『おさるのこうすけ』は、こうすけという名のおさるを描いてはいません。こうすけという名の弟を描いています。

そうです。弟って、おさるなんです。と、こうすけのおねえちゃんは主張してます。きっと武田美穂も訴えています。

公園にえりちゃんと遊びに行くときも、みやびちゃんちに子犬を見に行くときも、プールに行くときも、後を付いてくる。

今日、おまつりの日も一緒に行くって言う。一人っ子のえりちゃんやみやびちゃんは、いいよって言うけど、それは毎日おさと接していないからだ。

案の定、神社にたどりつくと、弟のおさる力は全開。なんかもう、うんざりしてしまったおねえちゃんは、いけないけど魅力的な考えに……。

おねえちゃんて大変なんですね。弟としては、おねえちゃんに甘えきって、安心しきっているから、やりたい放題になるんですけど、それに付き合うのは大変。親のように食事やお小遣いみたいな、弟を^{おとな}温和しくできる切り札もないし。なんかもう、いい加減にしろ！ って気持ちになるのもわからないではありません。ありませんけど、弟だった私は、この作品を読んで、ため息ひとつ。「そうなんや……。弟って、おさるなんや。今まで知らなかった……。おねえちゃん、ごめん」

(ひこ・たなか／児童文学作家)



「おさるのこうすけ」
武田美穂／作・絵
本体価格1300円＋税

おねえちゃん、ごめん

ひこ・田中

雨の日が楽しみになる一冊
ぴちやぴちや とんとん

笹野 智子



「かさちゃんです。」
とよたかずひこ／さく・え
本体価格800円＋税

大好きな、とよたかずひこさんの「たのしい いちにち」シリーズの3作目『かさちゃんです。』。さっそく、こども園で読んでみました。

1歳児は、じーっと見えています。いろんな色が出てくるのが楽しい様子。さらに色に興味が出てくる2歳児ごろからは、ファンタジーの世界にも入り込んで見入っています。「くるりん とん」と閉じたかさが出てくると、「ないねー」。かさちゃんが自分でぱっと開いて、顔が見えると、「あったー」と、声をあげていました。ほかのかさも出てきて、つぎつぎに色が増えるたび、「ピンクー！」「青ー！」「水色ー！」と指差して絵本のまわりに子どもたちが集まり、次のページにいけなくらいの大騒ぎになりました。

また、言葉の音が楽しいんです。「ぴちやぴちや とんとん ぴちや とんとん」「ぼつん ぼつん……ぼっ」軽快な音に、子どもたちはけらけら笑います。何度も読んでもらううちに一緒に言いたすことでしょう。

最後にはかさちゃんが、「あしたもあめ！ いっしょにおでかけしようね！」と誘ってくれるので、雨の日が待ち遠しくなって、かさをくるくるしたくなること間違いなし！

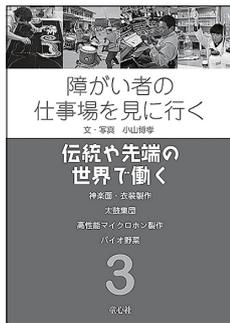
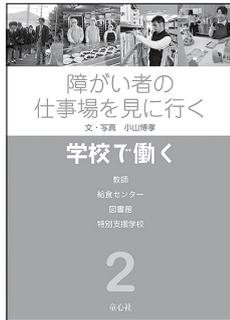
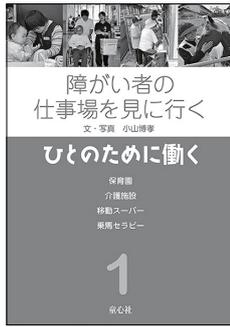
とよたさんのあかちゃんや、食べ物、そして身近なものたちが自立して、動き出すナンセンスな可愛い世界は、あかちゃんから大人までを魅了します。この絵本もまさにその代表だと思います。

(ささの ともこ／南ヶ丘こども園保育教諭)

BOOK

「障がい者の仕事場を見に行く」を編んで

松矢 勝宏



「障がい者の仕事場を見に行く」

- 1 ひとのために働く
- 2 学校で働く
- 3 伝統や先端の世界で働く
- 4 私たちのこと、もっと知ってほしいな

小山博孝／文・写真

松矢勝宏／編著

本体価格各2800円＋税

この本を小学校高学年や中学生に読んでもらいたいと考えて編みました。

第1巻から3巻までの著者は写真家の小山博孝さんです。障害者雇用促進法の運用に関係する独立行政法人が、企業の事業主をはじめ関係者の理解と啓発を目的に発刊している広報誌「働く広場」のグラビア等に発表した写真を中心に編んだものです。新しく撮りなおした写真も含まれています。小山さんはこの広報誌が発刊されたときから40年間にわたって企業等で働く障がい者を撮り続けてきたのですから、日本で一番、多くの働く障がい者を知っている人です。

障がい者の雇用促進施策は身体障がい者からはじまり知的障がい者、精神障がい（発達障がいを含む）者へと広がってきました。私たちは障がい者の仕事場を企業に限らず、福祉の領域にも求め取材してきました。「国際障害者年」、とくに1983年からの「国連障害者の10年」を経て、本人主体と社会への完全参加の理念が具体化されるにつれ、障がい者は匿名でなくご自身の姓名をオープンにして取材に応じてくださるようになりました。この広報誌の主人公は障がいのある人たちです。小山さんは障がい者の仕事場を第1巻『ひとのために働く』、第2巻『学校で働く』、第3巻『伝統と先端の世界で働く』の3領域にまとめ紹介しています。このような内容の本なので、子育ての悩みをもつ親御さんにも参考になると考えています。

私が担当している第4巻『私たちのこと、もっと知ってほしいな』は「障がい」あるいは「障がい者」理解を深める目的で編みました。そして事例を通して読者のみなさんと一緒に考えるために、子育てから社会参加を実現していく過程で出会ったさまざまな課題をどのように解決していったか、またどのような支援が必要であったか、3人の母親の立場から語っていただきました。

いま私は社会福祉法人の仕事をしていますが、どんなに障がい者が重い人であっても、充実した人生があることを知っています。人間の尊厳と生命の価値を独断的に否定する第二の相模原事件が絶対にあってはならないのです。このような願いから、障がいの重い人々の生活をもっと多く紹介する『私たちのこと、もっと知ってほしいな』の増補版が実現できることを期待したいと思います。

（まつや かつひろ／東京学芸大学名誉教授）

5月の新刊図書!

おばけ・行事えほん

たなばたにようぼう

常光 徹/文

野村たかあき/絵

本体価格1300円+税



天人と結婚した地上の男は、女房をおいかけて天にのぼりますが……。七夕の由来を描いた、「おばけ・行事えほん」シリーズ第1作。

単行本図書

雨ふる本屋と うずまき天気

日向理恵子/作

吉田尚令/絵

本体価格1400円+税



〈雨ふる本屋〉に、すきまの世界に危機が迫る! そんな時ルウ子とサラが出会った摩訶不思議な女の子、ブンリルーの秘密とは……。

読者の声

松谷みよ子 あかちゃんの本
あかちゃんのうち
松谷みよ子/ぶん
いわさきちひろ/え
本体価格800円+税



私は祖母に預けられ、全く絵本を読み聞かせてもらったことがありませんでした。母になった今、娘にどう話しかけて良いのかわからず、この絵本を手に取りました。自分がして欲しかったことが、本の中にあふれていて、いまだに涙なく娘に読むことはできません。(神奈川県 Y・M 三九歳)

五味太郎 おでかけシリーズ
げんきにおでかけ
五味太郎/さく
本体価格1000円+税



幼稚園の先生をしております。まだ一度しか読んでおりませんが、子どもたちも「どん」しすぎ!!と喜んで見ていました。色々な受け止め方をしていと思うので、何度も読み聞かせていきたいと思えます。(北海道 D・O 二八歳)

童心社創立60周年記念

公募のお知らせ

かみしばい作品 & 脚本募集!

紙芝居のさらなる可能性を追求するため、新しい作家の発掘を願い、創作紙芝居の作品・脚本を募集いたします。

募集期間：2017年3月1日～2017年7月末日

詳細は童心社ホームページへ

<http://www.doshinsha.co.jp/>



あとがき

●子どもの頃わくわくして読んだ本なのに、おとなになって読み返したらスカスカの内容でがっかり、という体験をよくします。書名は挙げませんが、そうした作品は道具立てが魅力的なので、子どものイマジネーションが自動的に発動し作品世界を豊かなものに感じるのでしょう。本は、子どもにとって想像力のジャンピングボードなのだと思います。◎

●入社して子どもの頃読んだ本の作者や編集者に会ったとき、時空を超えたような不思議な気持ちになりました。そして、人生をかけて子どもや絵本に向き合う姿を目の当たりにし、読者はこんなにも愛されているのかと思いました。その見えない温かさを幼い私は感じていたのだと。これからもその温もりの力を信じて、1歩ずつ進んでいきたいです。®

2017年5月15日発行(毎月刊)
母のひろば 第636号
定価50円(年600円/送料とも)
発行所: 童心の会
〒112-0011 東京都文京区千石4-6-6
株式会社童心社内
電話03(5976)4402
編集発行人: 大熊悟
童心社のホームページ:
<http://www.doshinsha.co.jp/>
フォーマットデザイン: bise inc.

定期購読のご案内

おハガキにてお申し込みください。下記QRコードからもお申し込みいただけます。見本誌(無料)と振込用紙をお送りいたします。

見本誌に同封されている振込用紙で購読料をお支払いいただけますと、手続き完了となります。購読料金は1年分600円(送料とも)。

